天使の舞い降りる時

seiron

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天使の舞い降りる時

【Ｎコード】
Ｎ３３２４Ｄ

【作者名】
ｓｅｉｒｏｎ

【あらすじ】
ありきれた学園生活、屋上に足を踏み入れてそいつと出会った。

天使の舞い降りる時

「あの……さ、なに――してるの……？」

彼女を見つつそう言ってみたはよいものの、何をしているかなど既にわかっていた。

高校に入って一週間、そして「全く、最近の学校は屋上閉鎖があたりまえなのか？」と悪態をつきながら無理やり扉をこじ開けて登ってきた屋上に、彼女はいた。

学校指定の制服に身を包まれたその背では、長く少し焦げた茶色の髪が風と共に躍っている。

放課後と言うこともあって、日は傾き夕日へと姿を変え、一面赤とは言えないものの、屋上を朱色に染めている。グラウンドからは、甲子園を目指す熱い野球部のかけ声が届く――。

屋上には転落防止用のフェンスが張り巡らされており、その向こう側に余分なスペースとして、幅１ｍほどの空間がある。

一歩間違えば転落事故――そこに、彼女はいた。

見方を変えれば、「大恋愛を経たラブストーリーのクライマックス！」そんな雰囲気さえも感じられるのだが――ぶっちゃけ、危なすぎるんですけど。

風が止んだかと思うと、彼女は俺に気付いたかのように振り返る。黒い瞳が俺を捉える。

ぁ……と呟きを漏らしそうになるほど整った顔立ちをしていた。一言で言うと、美人と言うのだろう。しかし、どこか幼く可愛げな匂いもした。

……正直俺のタイプですよ、ええ、ど真ん中にヒットしちゃってますよ。

「夕日、綺麗」

「……そ、そうだね」
独り言のように呟く彼女は、俺に話しかけているのかどうかさえ怪しい。
彼女の姿を見た瞬間、無責任にも引き返そうかと思った。けれど、もうそんな気は起きなかった。彼女の、その存在が異様なほど俺を惹き付けた。
「所で……君だれ？」
「ぁ、俺は――」
「あっ、別にいいわ。興味ないし」
彼女は最後まで聞かずに切り捨てた。しかも「あんたに興味なんて無いのよ、馬鹿」の蛇足つきだ。
「なら、聞くなよ」と内心呟くが、そんな想いと裏腹に彼女の姿にドンドン引き込まれていく。入学して間がないとは言え、一度も見たことのない顔だ。
学年レクレーションなどでも見かけなかったということは、上級生という可能性もあるが、噂さえ聞いたことが無いというのもおかしな話だ。
可愛い子の情報というものは意外と早く知れ渡る物だ。皆が新たな高校生生活に期待を膨らませるからなのだが――
「私ね、神様なんていないと思う」
「はっ、はい？」
思考を遮るかのように、突然彼女は話し始めた。
とはいっても、俺の返答など気にしていないのか、一息置くと、夕日を見つめながら続けた。
「いままで、一度も”神様ありがとう”なんて思ったこと無いんだもん」
とんでもない電波少女なのかもしれない――そんな考えが脳裏を走るがとりあえず、答えてみた。
「そんなに不幸なのか？」
「君はこの世界にどれだけ裕福な人がいて、どれだけ貧しい人がい

ると思う？
私達がこうしている間に何人の人が殺されて、どれだけの子達が死んでると思う？
――君は不公平だと思わないのかな？」
振り返って問いかける彼女に一瞬胸が高鳴るが、間をおかず答える。
「は、はぃ？」
――否、答えになっていなかった。
「神様が人を救う為存在なら、どうしてそんな差がうまれるの？
助ける人を選んで、気に入らなかった人達はそのまま放っておく……。
そんなのが神様だなんて、おかしくない？」
そこで、今まで止んでいた風が、再び吹き始めていることに気付いた。
彼女は髪を撫でながら、俺の目をじっと見つめる。
あまりにもまっすぐ見つめる物だから、完全に返事をするタイミングを逃した。
すると微笑みながら顔を夕日の方に戻し、そのまま話し続けた。
「私ね、神様ってずるいと思う。
だって、例え全ての人たちに助けを差し出したとしても、裕福な人と貧乏な人に与える物は違うのよ？
決して同じ物は与えてくれないのよ？
それなにの、『私は神様なんだぞ』って人々に崇められていい気になっているだけなんて……凄く性格悪いと思うんだ」
口から出している言葉とは反対に、どこか我がままを突き通そうとする少女のような感じがした。
だからこそ、放って置けないと、俺はそう思ったのかもしれない。
「そうじゃ、ない……。そうじゃ……ないと思う」
彼女に、初めて自分の声で言ったような気がした。それまで俺の口にしてきた言葉が、偽りだったかのように。

「確かに全ての人に同じ物を与えたりはしてないだろうし、祈っても助けてくれない事もあるかもしれない。
本当に神様って居るのか居ないのか、はっきりとはわからないけどさ……。
幸せとか不幸とかって、その人の受け止め方で変わるんじゃないかな？
例え不平等に見えても、どんなに貧しくても、どんなに裕福でもさ、その生活の中で与えられる幸せや苦労は同じだと思うんだ」
「……そう、だと思う？」
少し振り返り、そうつぶやく彼女は、幼い少女へと戻っていた。
一歩ずつ、確実に足を踏み出しながら、俺は言葉を紡いでいく。
「そういう風に、思ってみないか？」
また、一歩、また一歩と足を進め、手を伸ばせば彼女に届きそうな距離まで近づいた。
「そしたら、世界が変わって見えるかもよ？　魔法みたいにさ」

「――ありがとう」

”「あのさ、なにしてるの」”
”彼女を見つつそう言ってみたはよいものの、何をしているかなど既にわかっている。”
見たときから、わかっていた、そこから飛び降りようとしていた。
駆け寄れば、刺激して落ちるかもしれない。
だから、駆け寄ろうかと悩んでいる内に足が縛られたように、動かなくなったんだ。
でも、いまなら手を伸ばせば届く――
だから、フェンスに腕をかけ、もう片腕で彼女の腕を握る――が、俺の手は宙を掴み、彼女の体は宙を舞っていた。
ふわりと浮く彼女は夕日に照らされ、その顔は眩しく微笑む。
「貴方も世界が変わると良いわね」と呟き――視界から消えた。

急いでフェンスを飛び越え、下を覗き込み探すが彼女の姿はなかった。
もしかして、どこかに引っかかったのか？
そう思って探すが、何処にも姿は見えい。一体何処へ――？
呆然としていると、白い何かが目の前で舞い踊っていた。
慌てて掴み取り、手を開くと白い羽が横たわっている。
そういえば、あの子はどこから入ってきたんだ？
蹴り開けたせいでさびた鎖はちぎれ、扉の付け根は外れてキーコーと音を立てている。そんな寂しげな入り口を振り返り。
呆然と、そう思った――……。

「まったく、世話の焼ける娘だ」
そう呟きながら、私は白髪がまた抜けるのを見てため息をつく。
部屋の片隅では、粉々に砕けた花瓶や彫刻を兵士達が「我々は雑用に為に居るのではないのに」と愚痴をこぼしながら片付けている。
「ただいまぁ～」
突然扉が開くと、問題の娘が入ってくる。あれほど怒っていたというのに、笑顔でのお帰りだ。
何かあったのかもしれないな、人間界で――。
少しの間目を閉じ、意識を集中し情報を集める。
少しは学んだのだろう、今回のことは忘れてやろう。そう思った矢先、娘は私の髪を指して言った。
「ぁ、剥げてきてる。もう歳だねっ♪」

「パパッたら、あんな事で怒るなんて！
やっぱり、神様なんて嫌い、大ッ嫌い！」
次の日、同じ時間帯に屋上に行くと、あの彼女が同じ場所にいた。
なにやら、怒っていらっしゃる模様。昨日の面影はどこへ行ったのだろう――

そこで、仕方が無く、夕日に問いかけるように呟いた。今回は、心底めんどくさそうに。

「あのさぁ……なに、してるのかな？」

ＥＮＤ

（後書き）

ｓｈｏｒｔ３という、１０００文字以内だったかな？とにかく短い短編物です。電撃文庫の企画で３つのお題を含んだ作品を作るってコンクールだったはず。自分の中では駄作にはなっていないと思っています。ありきたりのテーマで内容ですが、珍しくまとめられた作品。■訂正していて気付いたんですけど、この頃から「ツンデレ要素」が含まれ始めてるような気がします。この頃ってまだツンデレ作品読んでない気がするんだけど……どうだったかな？普通に「ラグナロク」呼んでた気がします。ゲームじゃなくて、バトル中心でストーリー性皆無、そしてグロすぎるあれね？■――それにしても、この少女不思議っこ過ぎる。　書いておいてアレなんですが。初対面の子が幾ら可愛いからと言え、突然『神様が――』なんて話を聞いたら「あ、宗教関係者の方ですか」ってガックリ来ると思うんですよね。宗教はあまり好きではないです。可能性は祈りではなく、努力で切り開く物だと思いますので。作品の存在意義を完全否定っ！■良いことがあれば悪い事がある。なら、とても裕福な人にはとても悪い事がおこるのか？逸れは違うと思います。どんなに裕福でも貧乏でも、その生活の中で幸せな事や不幸な事があるんですよね。これは「住む世界が違う」っていう諦めでもあるんですけど。■最後の部分はまさに『蛇足』であり、関西人の血が騒ぐ『オチは無いのか！？オチは！？』の部分だったりするので。■中学時代（？）に書いたかと思われます、ふるーい短編なのですが、自分のスタイルとは全く違った血が飛び交わない物語な訳で、すごーく書き辛かった記憶が……少しは綺麗な話を書けるように頑張らないといけませんかね。ではでは。最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3324d/

天使の舞い降りる時

2010年10月8日15時08分発行